

INDEX

- 1 麻原死刑判決に想う
- 2 高橋弘のモルモン人物伝
- 3 投稿
- 4 モルモンの反ゲイ団体とその「治療」
- 5 リアホナを斬る 2004年3月号
- 6 モルモンQ & A
- 7 ニュース

わたしたちの活動と自己紹介ページは [こちら](http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/htm/about.htm)
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/htm/about.htm>

~ ご購読ありがとうございます ~

麻原死刑判決に想う 運営委員：大喜多秀起

2004年2月27日オウム真理教教祖麻原彰晃（松本智津夫）が死刑判決を受けた。この判決に前後して、各メディアは一斉にオウム事件の報道を再開した。「オウムを風化させまい」「カルトの問題は尚も継続している」この姿勢は正しい。オウムは今後も徹底的にカルト問題のサンプルとして研究されるべきである。しかし、果たしてオウムの前にカルトのサンプルはなかったのか、と私は思う。NHKスペシャル「オウム 獄中からの手紙 ~死刑判決を受けた被告たち~」を見た元モルモンが死刑囚と自分の姿がダブって見えたと言った。その言葉に私は元カルト信者同士としての共感以上のものがあると思った。そして、オウムがモルモン教に酷似していることに驚かされた。

終末論や稚拙なニセ予言などカルト宗教に共通するものだけでなく相当な類似点がある。麻原とジョセフ・スミスはともに宗教団体を設立する以前から犯罪者であり、有罪判決を受けていた。両教祖とも現世の権力に憧れ、大統領、衆議院に立候補した。両教団とも宗教国家建設を妄想し各地を転々とし、上九一色、ソルトレークに模擬国家を建設した。両者ともに政府と敵対し武装を行い戦闘行為も行った。知事を暗殺しようとしたモルモン教、弁護士一家を殺害したオウム。両者とも殺人、テロ、内部粛清を救いの教義として教えていた。あまりにも類似点が多いのである。（むしろモルモン教のほうが悪質かつ大規模であろう）

モルモン教が設立して既に約200年、来日して100年である。確かにモルモン教研究の日本語資料は極端に少なかった。しかし、この期間モルモン教をもっと研究しておけば、オウムが弁護士殺害やサリン事件のような暴発を予見する事は可能だったのではないかと。私の思いはそこに及ぶ。

「オウムを風化させない」という事はもちろんである。しかし、モルモン教を見直す事もそれに劣らず重要だ。立花隆はモルモン教を「成功したカルト」と評した。モルモン教をこれ以上「成功」させてはいけなく、今後「成功」するカルトを生み出してはいけなくからである。

高橋弘のモルモン人物伝(1) フォーン・プロディー

フォーン・プロディー（1916～1981）...伝記作家として有名。リチャード・ニクソンやジェファソンに関する伝記などを著す。最後はカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）歴史学教授。No Man Knows My History は米国内外で高い評判を勝ち取ったモルモン教の教祖スミスの伝記。永い間、真実のモルモン教を知りたいと望む人々の間で隠れたベストセラーになった...

プロディーはユタ州オグデン生まれ...プロディーの父親はトーマス・マッケイ（スイス/ドイツ・ミッションの責任者、オグデン・ステーキ部長、ユタ州上院議長、ウエーバー・カレッジ評議員長、等を務める）。伯父（父の兄）はデイヴィッド・マッケイで、十二使徒。後の第九代大管長（1951～1970）。母フォーンは自ら絵を描きリベラルな考えの人（娘の信仰や教会にたいする疑問を叱らなかつた）。祖父（母の父）はジョージ・プリムホール（プリガム・ヤング大学の学長（1904～1921）を務める）...大変「毛並みの良い」敬虔なモルモン人の家庭で成長するが、幼い時からいろいろ疑問を抱えていた。知能指数が高く、18歳でユタ大学を卒業。ユタ大学では哲学教授E.E.エリクソン（「アイデンティティ」理論で高名）等に出会い大いに啓蒙され、自らの信仰を深く吟味するようになる。

シカゴ大学大学院に進み20歳で卒業。ユダヤ系の研究者と出会い20歳で結婚。その後ジョセフ・スミスの研究を開始。弱冠27歳のとき「出版するつもりはなかつたが、良い伝記がなかつたので出版」。高い学術に裏付けけられた「教祖」に関するモルモン教の内部から出版された最初の本格的伝記であ

には「ユタ歴史協会」から「フェロー」の榮譽を与えられる。

この出版についてのプロディーの言葉。

It was a rather compulsive thing. I had to. It was partly that I wanted to answer a lot of questions for myself. There were many questions that no one had answered for me. I certainly did not get any of the answers in Utah. Having discovered the answers and being excited about them, I felt that I wanted to give other young doubting Mormons a chance to see the evidence. That, plus the fact that I had always wanted to write, made it possible -not made it possible -made it imperative that I do a serious piece of history (1975, 10).

「止むに止まれぬ思いから伝記を書きました。どうしてもそうしなければならなかったのです。一つには、自分が抱えていた疑問にどうしても答えを見つけたかったからです。誰一人答えてくれなかった多くの疑問があったのです。ユタでは解決できませんでした。とうとう答えが見つかったとき、本当に嬉しくて、疑問を抱えて悩んでいる若いモルモンにも（私の発見を読んでもらって）自分で考えるチャンスあげたかったのです。それに、前々からしっかりした歴史書を書きたいと思っていたからです...」

またプロディーには、教会学校で過去に本当に正しいことを教えてきたのかがどうか確認したい、という動機もあったようだ。間違ったことを教えていたのであれば、現在自分が本当に正しいと信じていることを、お詫びと訂正の意味で、かつての教え子たちに伝えたい。一刻も早く良心の呵責から解放されたい、という気持ちだったそうです（大変良心的人物だと思います）。それは、なぜかといえば、その後の述懐によれば、「...本を書き始める前から、私はジョセフ・スミスは真の預言者ではないと確信していました」と語っているように、薄々疑問に思っていたにもかかわらず、一般信徒同様、信じているという立場に立って教会で教えなくてはならなかったからだ。

この本が原因で、翌年教会から破門される（このとき、モルモン教会の御用学者ヒュー・ニブリーは、教会の擁護のためにNo Ma'am That Not Historyという極めてレベルの低い本を書き、プロディーの評判を貶めた）。

ところで、地方の教会代表を通じて破門を伝えられた言葉は次のとおり。

You assert matters as truths which deny the divine origin of the Book of Mormon, the restoration of the Priesthood and of Christ's Church through the instrumentality of the Prophet Joseph Smith, contrary to the beliefs, doctrines, and teachings of the Church.

「あなたが真実だとして主張していることが、キリストの教会（モルモン教会）と神権が（神の）器である預言者ジョセフ・スミスをとおして再建されたということ、またモルモン書が神から与えられたものだということモルモン教会の信仰、教義、教えに反している（からである）...」。しかし、この破門を契機として、プロディーは二度とモルモン教会には戻らなかった。

プロディーは、その後機会ある度に手紙やインタビューで語っている（上に用いたのはその一部）。また、いろいろな人がプロディーの著書の書評や評価をしている。また、プロディーと長く親交のあった作家ジュアニタ・ブルックス（マウンテン・メドウの虐殺に関する優れた歴史書を書いている）との書簡が多く残されている（この話はまた別のところで...）。

さて、今日、プロディーよりはるかに詳しい研究がつつぎに出版されている。しかしモルモン教の内部に学術的な研究を誕生させた最初の契機を作ったのはプロディーである。プロディーが画期的なのは、それは誰も何もあえてしようとしなかった時代に、あえて研究者としての自らの良心に従った、という一点につきる。

<参考文献>

Fawn Brodie and Her Quest for Independence, by Newell G. Bringhurst, Dialogue, Vol. 22, No. 2, p.79~91

No Man Knows My History, the Life of Joseph Smith, by Fawn Brodie, Alfred A. Knopf, Inc., 1971

A New Climate of Liberation: A Tribute to Fawn McKay Brodie, 1915-1981, by Sterling M. McMurrin, Dialogue, Vol. 14, No. 1, p.73~76

投稿 「モルモン教会に通いつつ」 りり

私は今まで長年モルモンにいて、偽善者だなあ~と思える人に多く会ってきました。もちろん偽善者は多いのですが、私が思うにモルモンの組織自体にその教え自体に人を偽善に走らせるものがあるように思います。その多くが大管長の教えとして教えられているものです。たとえば・・

「忠告することは愛である」とか

「聞くことは関心を持っていることだからそれは愛である」

などという教えです。

ついでに家庭訪問をすることも、集会に誘うこともみな愛だと言うことになってしまいます。このようにある種の行動をとって、それは愛であると規定すること自体が間違っていると思うんです。

考えてみてください。愛ってなければ示せないんです。自分の中に愛がなくてどうやってそれを示せますか？それなのにモルモンの教えでは心の中なんか関係なしに「～を行う」ことがすなわち「愛だ」というのはおかしくありませんか？

おかげで心の中なんか気にも留めずにその行為だけがやたらとはびこり、あげくはこれをする理由が「愛」どころか「憎しみ」である場合も多いのです。聞くことが愛どころか、ただのあら捜しの道具となりはて、忠告は仕返しのやり方になっていく。

何が愛かは一人一人違うはずです。たとえば傷ついた人がいるとしましょう。その人にどう接したらいいかは人によって考え方が違います。声をかけてやればいいと思う人はそうするだろうし、そっとしておいたほうがいいと思う人はそうするでしょう。

しかし「挨拶するのは愛を示すこと」という教えの元、前述の人しか評価されないのです。私はその人のためにしたことであればどちらも正しいと思います。ただその人のことなんか少しも考えずに「そうしたほうが自分の評価が上がる」とか「そうしなければ愛がないと思われる」とかの理由だけで挨拶する人って最低ですよ。

私は現在教会に通っていますがそういう愛のない挨拶を受けることがよくあります。そういう偽善者には挨拶すらされたくないと考えてしまいます。もちろん私のために思って声をかけてくれる人もいますけれども。。

最後にパウロの言葉を書いておきます。

「たとい私が入りの言葉や御使いたちの言葉を語っても、もし愛がなければ、私はやかましい鐘や騒がしい饒鉢と同じである。たといまた私に予言する力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、また山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ私は無に等しい。たといまた私が自分の全財産を人に施しても、また自分の身体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ一切は無益である。」(第一コリント1:1~3)

なんだかすごくレベルの高い言葉でこんなものの比喩に使うのが申し分ないくらいです。

レポート モルモンの反ゲイ団体とその「治療」 たりき

アメリカでのゲイのモルモン教徒に対する「電気ショック療法」について、インターネットの掲示板に書き込みをしましたが、今回はそれに加筆をしてご紹介します。

この類の話題には、ご興味のない方も多いのではないかと、思いますが、しばしお付き合い下さい。

まず初めに、モルモン教では、同性愛は罪とされており、同性愛者による性的行為は禁じられています。この考えはモルモンに限らず、アメリカのキリスト教原理主義と言いましょつか、極めて保守的な教会(大きいところでは、南部バプテスト教会など)でもほぼ同じです。また、モルモン教では同性愛は矯正可能とされており、その矯正をせせと行っている事も、他の保守的な教会と似ています。同性愛問題に関しては、モルモン教の「十二使徒」であるボイド・K・パッカー氏が、しばしば同性愛は、「努力次第で克服可能」と発言していたのを、ご記憶の方もいらっしゃるかと、思います。

さて、アメリカでの同性愛モルモンを語る際、Evergreen International という、モルモン教の「ほぼ」外郭団体が存在するのをご存知でしょうか？

<http://www.evergreen-intl.org/>

今回は、この団体が行っている活動について、ご紹介しましょう。Evergreenは、ソルトレーク市に本部のある、主に同性愛者の性的志向を「矯正」を施すための団体で、その「矯正」のプロセスは、モルモン教の教義に基づいて行われています。(この団体は、モルモン教会とは直接の関係はない、と表向きは主張していますが、モルモン教の教えは全て支持する、とも表明しているの、モルモン教の息がかかった団体である事は、明白です。)

彼らのウェブサイトに掲げられた信条(Mission Statement)によれば、
<http://www.evergreen-intl.org/filecabinet/htmlfiles/mission2.html>

「キリストの購い」によって、「永遠に繋がる幸せを阻害する罪や状態(同性愛の事を言っています。)」から、「全ての魂」が回避できることが可能になったので、同性愛もまたキリストのおかげで「克服」できるものなのだそうです。これは、先にご紹介した、パッカー氏の発言と同じですし、モルモン教会内でも、語られる事は多くは無いものの、一般的な認識であると思います。現に、BYUのある心理学の教授が、「同性愛は選択であり、矯正可能」と口にしていたのを、私ははっきりと耳にした事があります。彼もまた、この団体の主張に影響されていたのかもしれない。

この団体については、日本の教会員でご存知の方は少ないと思いますが、アメリカの教会指導者(監督など)は、ほとんど知っていると思われるし、アメリカの一般会員でも知っている方は少なくないでしょう。通常、アメリカのモルモン教会では、教会員(青少年や若い女性も含まれます。)が、自分の同性愛の傾向について監督に告白すると、ほとんどの監督はこの団体に連絡する

トを見た記憶があります。)そして同性愛に悩む教会員は、Evergreenの無料の電話番号に電話をして、相談できる様になっています。

上に記した事だけでも、何やらきな臭そうな団体に思えるEvergreenですが、この団体の施す「同性愛治療」が本当に問題なのは、実は悪名高い、「電気ショック療法」を取り入れているからなのです。(もちろん、Evergreenの公式ウェブサイトには、それは書かれていませんし、この事に関してEvergreen側は、今も沈黙しているはずです。)

Evergreenが行っている「ショック治療」が、どれほど同性愛者にとり、残酷なものなのかは、Affirmation(下で簡単に説明しています。)のウェブサイトでも紹介されています。

http://www.affirmation.org/learning/true_life.asp

この記事によると、2002年に若者に人気のあるMTVで、ユタ州に住む、ゲイのモルモン4人について特集された際、その一人、Joyce君が放送の数年前に、Evergreenで「ショック療法」を受けたことを語ったそうです。「治療」では、彼の陰部を含む身体の数ヶ所に電極が繋がれた後、強制的にゲイのポルノ写真を見せられ、その間、ずっと電気ショックを受け続けたのだそうです。その電流の痛みは絶えがたいもので、実際に彼の身体が電流のショックで震えたそうです。セッションの度ごとに、電流のボルト数が上げられたにも関わらず、彼はその痛みを我慢するしかなかったそうです。また、この「治療」の内容については、団体から固く口止めされていたので、彼は誰にも相談する事が出来なかったそうです。

おそらくこの団体はこの危険な「治療」については、公に認めることは無いでしょう。現に団体のウェブサイトでは彼らが行う「治療法」として、カウンセリング、グループミーティング、ファイヤサイド、カンファレンス、カウンセラーや教会指導者によるトレーニングなどしか、挙げられていないのですが、この団体による「ショック療法」は、現在でも広く行われているもの、と思われる。

余談になりますが、同性愛を苦に自殺したモルモン教会員の名前のリスト(おそらく、実際の自殺者はもっと多いのですが)が、こちらで見られます。

<http://www.affirmation.org/suicides/suicides.asp>

(このウェブサイトは、Affirmationのもので、Affirmationは、モルモンの同性愛者達のグループで、彼らのウェブサイトからは、自分達の性的志向について肯定的に捉えようという姿勢が感じられます。)モルモンの同性愛問題については、語るべき事も多いのですが、今回は、この辺で失礼します。

連載 リアホナを斬る (第1回) 木塚灯八
2004年3月号 大管長メッセージ「平和を見出す」

木塚灯八と申します。今後ともよろしくお願ひいたします。私自身のご事は詳しく申しあげることができませんが末日聖徒イエス・キリスト教会の事情を良く知る者で教会の誤った部分を見かねている者としてお知りおきいただければと思います。

今回は、リアホナ2004年3月号をとりあげて考えてみたいと思います。

今月の大管長メッセージはモンソン氏による「平和を見出す」というテーマになっています。モンソン氏は世界情勢の混乱を提示してモルモン会員に不安をいだかせ、次に3項目を提案してこれらを行えば平和を見出せると言う論調で話を進めています。しかしこれら3項目を読んでも一体こんなことで何が平和になるのか首を傾げたくなくなってしまいます。

その3項目と言うのは、

1. 自己を探求する
2. 人に手を差し伸べる
3. 天に目を向ける

ということですが。なるほど項目自体は決して悪いことではありません。

しかしそれぞれについてモンソン氏が語っている内容はかなりずっこけたものなのです。

まず、「自己を探求する」ですが、モンソン氏はここでベンソン大管長の次のような言葉を引用しています。

『平和の代価は義です。人々や国々は『平和、平和』と大声で主張しますが、平和を得るためには、各自が平和を育む特質である、個人の清さや高潔さの原則を身に付ける必要があります』

どうやら末日の生ける予言者の言葉によると世の中が平和でない原因は各自の特質に問題があるようです。近代の戦争というものは国家間の利害関係の衝突に国民が巻き込まれ、最も犠牲となるのは社会的弱者であり、戦争をやめたり回避したりする立場の人間は最後まで安全なところにいるという構図です。そこに世の中の不条理と悲劇があるのだと思いますが、末日の生ける予言者は、平和を育む特質がないから戦争になるのだと言いたいようです。

なんとも安直で浅薄な考えだと感じます。

モンソン氏はベンソン大管長のほかにも何人かの言葉を引用し最後にソルトレークのホールで「美女と野獣」のショーを見に行く親子連れを目にしたことをあげて、それを「愛の実践」「神からの優先順位に従って時間を調整しなおした姿」だと大絶賛します。

なんともあきれてしまう話です。戦争の不安におびえる人たちは平和を見出

ていると言いたいかのようです。

私には世間知らずの金持ちが、自分が他人の苦勞の上に胡坐を書いていることも知らずに平和自慢に花を咲かせているように聞こえてしかたありません。さて2番目の項目は「人に手を差し伸べること」ですが、この中でモンソン氏が勧めているのは、教会の責任を果たすことです。そして例をあげているのはどこかの初等協会の子供たちがそろって神殿にいったという出来事です。この話のいったいどこが人に手をさしのべているのでしょうか？ テーマと内容がこれほど乖離した文章も珍しいです。

それとも、「人に手を差し伸べる」という言葉はソルトレークでは「モルモン教会で与えられた責任を果たす」という意味を表す独特の方言なのでしょうか？

最後の項目は「天に目を向ける」ですが、ここでモンソン氏は祈ることを勧めています。祈りを勧めるのは結構なことですがその後でモンソン氏の引用する文章が不可解です。

それは南北戦争時代のバルー少佐という人が戦死する戦いの1週間前に妻に宛てた手紙らしいのですが以下のような文章が含まれています。

『・・・サラ、わたしの死を悲しまないでください。わたしは霊界に先に行ってあなたを待っていると思ってください。わたしたちはもう一度会えるからです』

モンソン氏はこの手紙から「彼の愛や神への信頼、勇気、信仰を感じとってください」と勧めています。しかし、モルモン教義からいえばこのバルー少佐は妻には二度と会えないはずですよ、神殿で身代わりの儀式を受けなければ。

モルモン教義とは違う信仰を感じ取れとおっしゃるモンソン氏の意図は一体何なのかさっぱり理解できません。もっともモンソン氏がモルモン教義など全く信じておらず、耳に聞こえのいい言葉だけをそこら中から集めてつなぎ合わせて(パソコン用語風について、コピペして)説教しているならこんな文章が出来上がるのも理解できます。

モンソン氏の挙げた3項目は共通点があります。それはモルモン会員なら誰でも普段からやれと言われていることです。子供と遊ぶ時間を作れ、教会の責任を果たせ、祈りをせよ、ということです。

です。この話を読むと、おそらくモルモン会員は、ああ自分は大丈夫なんだちゃんと平和を見出すことをやってるんだ、何もしなくてもいいんだという違った意味での安堵感が生まれるでしょう。まあ実際はそれは平安ではなく、巧妙に問題をごまかされただけのことです。しかし聞く側にとっては実に耳にさわりのいい話になるのです。

モンソン氏がこの説教のような文章を計算づくで作り上げているのだとしたら、相当な偽善者だと思いますし、何も考えずに書いているのであればかなり思い上がったホンモノの馬鹿だと思います。

モルモンQ & A まっぷ
掲示板などに、よく質問を受ける項目をQ & Aとして記載します。

Q1、
「無料英会話」のチラシを見て、友人と共に参加したところ帰りに「名前、住所、電話番号を教えてください」と言われ友人は断りましたが私は教えてしまいました、これって後で勧誘とかの電話などがあるのでしょうか、とても心配です。

A1、
この「無料英会話」はモルモン教会(末日聖徒イエス・キリスト教会)の信者を獲得するための手段のひとつです。

この他に、スポーツ会や食事会と称した活動でも参加された一般の方に勧誘をしています。お名前やご住所など個人情報を教えられたのは不用意だったかもしれません。

一見「宗教の勧誘」とは判らない手段で信者を獲得する方法を採っていますので、無料という言葉でつつい参加してしまい、数多くの方が個人情報を教えてしまっています。

当然、この個人情報を基に、後日、宣教師が貴方に電話連絡をしたり自宅などに訪問して来ます。

最初はあたりさわりのない話をしますが、目的は貴方をモルモン信者にするからですからその気がないのなら「はっきりと断る」ことが重要です。

ここで態度をはっきりさせておかないと、逆に脈があると思われ、勧誘を受け続けることになりかねません、断りづらいのは判りますが、ここは後の面倒を考えれば「はっきりと断る」という態度がとても重要です。

また、断ったのにもかかわらず電話や訪問が続くのであれば、当会へご連絡を頂ければ、担当者がモルモン教会に対して断固たる対応をいたします。
下記宛へメールでご連絡ください。

公式サイトメールアドレス jemnet@mrc.biglobe.ne.jp

ニュース

勇気と真実の会は会員募集中です。
詳しくは当会へお問い合わせ、または下記をご覧ください。
<http://seitonomichi.maxs.jp/postmail/postmail.html>

モルモン人物伝

素顔のモルモン教著者である淑徳大学教授高橋先生がモルモン人物列伝として連載の筆をお取りいただきました。初回はモルモン研究の草分けとして著名なフォーン・プロディと誠にふさわしい人物をお取り上げ下さいました。今回はマクマリンをご予定とのことで、ご期待いただきたいと思います。

リアホナを斬る

モルモン教会員である、木塚灯八さんが機関誌リアホナを批評コーナーを受け持って下さることになりました。初回は世界平和問題に関する記事を取り上げていただきましたが、昨今の世界情勢からもふさわしい内容であったと思います。氏にも今後の健筆に期待いたします。

モルモン教「スピーチコンテスト」

「全国高校生英語スピーチコンテスト」が今年（2004）も開催されます。主催が「ブリガム・ヤング大学・ハワイ校(略称BYU)」とありますが、その実行委員会・事務局はモルモン教の管理本部です、このBYU主催「全国高校生英語スピーチコンテスト」は信者を獲得するためのモルモン教の偽装イベントですので、ご注意ください。詳しくは下記をご覧ください。
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/htm/dendou.htm>

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。
投稿文はプレーンテキストで作成してください。

編集室から

念願の会報をようやく発行することが出来ました。四半期一度（3ヶ月ごと）のペースでお届けする予定でいます。より良い内容とするため、ご意見やご希望などご遠慮なくお寄せください。

メールマガジンのバックナンバーは発行後からとなります。

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://www5e.biglobe.ne.jp/~jemnet/index.htm>
- ・メールアドレス jemnet@src.biglobe.ne.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.
無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。
解除希望・お心当たりがない方はこちら <http://kapu.biglobe.ne.jp/regist.html>
クリックで簡単応募 ホームシアターが！ http://www.biglobe.ne.jp/index_kp.html